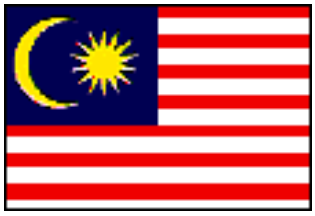


マレーシア国　　派遣期間 2012 年 3 月～2015 年 3 月

ペナン日本人学校　帰国報告

標津町立標津中学校
教　頭　加藤　和弘

１．マレーシア・ペナンの概要

（１）多民族国家マレーシア

国土はマレー半島南半分とボルネオ島北西部からなり、面積は約３３万平方キロメートル（日本の約０．９倍）である。赤道付近に位置するので年間を通じて高温多湿であり、日本でいう四季はない。

人口は、約２，９９５万人（２０１３年統計）である。民族構成は、もともとこの地に住んでいたマレー系の他に、華僑としてこの地に移り住んだ中国系、主にイギリス植民地時代にこの地に移り住んだインド系、その他の先住少数民族からなっている。

公用語はマレー語であるが、民族ごとにそれぞれの言語を母語としている。また、宗教も民族ごとに分かれているが、それぞれの生活習慣が違う中をうまく共存している。多分、世界の中で最も成功している「複合多民族、多言語、多宗教、多文化」国家ではないかと思う。

主な民族	言　　語	主な宗教
マレー系（６７％）	マレー語	イスラム教
中国系（２５％）	共通語としてマンダリン、他に出身地により広東語、福建語、海南語、客家語、潮州語など	仏教、道教、キリスト教
インド系（７％）	タミル語	ヒンズー教

暦も、それぞれの民族（宗教）が独自のものを使用している。各民族の主な祝祭日が連邦政府や各州の休日となっているが、日本が明治から採用している太陽暦とは異なるため、毎年、休日がずれることになる。例えば、イスラム教最大の祝日である「ハリラヤ・プアサ」（断食月明け大祭）は、今年（２０１５年）は7月１７・１８日であったが、昨年（２０１４年）は7月２８・２９日であった。

（２）マレーシアの教育制度

①母語を尊重する教育

マレーシアには、６：３：１の割合でマレー系、中華系、インド系の諸民族がいて、言語では、マレー語、中国語、タミル語と、イギリス植民地時代からの英語が縦横無尽に飛び交っている。その中で、国民型小学校として母語での初等教育が、共通のカリキュラムで全ての公立において自由に学ぶことができる。なお、マレーシアの教育は連邦政府直轄で、公立学校はすべて国立であり、公立学校の教員は全て国家公務員である。

②学校は自由に選択することができる

学校選択は自由である。（当然優秀・有名校には志望者が多く、入学の可否は学校側にある。）国民型小学校の中で、国民型中華小学校では、国語の授業はマレー語、多くの優秀校では数学と理科を英語、そのほかの教科や普段の会話を中国語で行っているが、国民型中華小学校には優秀・有名校が多

いので、マレー系やインド系の子供達も入学することができる。同じようにタミル語で行う国民型タミル小学校もある。なお、中華小学校やタミル小学校の中に一人でもイスラム教の子供がいたら、宗教の授業時間を設けて（その他の宗教の子供達は道徳）授業をしなければならない。

③教育制度

１月が新学年の始まりで、１１月中旬が学年末である。満７歳で小学校に入学し、６年間の小学校と、６年間の中学校（中１～３が義務教育）を、各州にある教育局が管理する。

各教育課程の節目に以下の全国一斉の統一試験があり、各学校、地方、州、全国の結果が一斉に公表される。

・小学６年時に UPSR(Ujian Penilaian Sekorah Rendah)=小学課程評価試験
・中学３年時に PMR(Penilaian Menengah Rendar)=初級中学課程評価試験
・中学５年時に SPM(Sujil Pelajaran Malaysia)=マレーシア教育証明試験
・中学６年時に STPM(Sujil Tingi Persekkolahan Malaysia)=大学入学資格試験

④マレーシアでの教育の実際～家庭科教育について

（ア）ＳＭＫブキツジャンブル校を訪問して

平成２５年８月２９日に、SMK ブキツジャンブル校(SMK Bukit Jambul、SMK は Sekolah Menengar Kebangsaan の略で、国民型中学校のこと。マレー系である。Bukit Jambul は地名)を訪問して授業を参観させていただいた。なお、ペナン日本人学校中学部は、毎年この学校と学校交流を行っている。

・中学２年(F2)の家庭科の授業で、「食事の調理」ということで、ハンバーガーの調理実習であった。２時間扱い。
・具材（チキンナゲット、トマト、玉ねぎ、レタス、ドレッシング、チリソース）は生徒各自で持参する。
・この授業は全員が女子（１１名）のクラスであった。指導している教員は中華系、生徒はマレー系・中華系・インド系が全て所属していた。この時間、男子は技術をしているとのこと。男子も、家庭科の基礎の学習はするとのこと。
・調理実習では、鶏肉くらいで、生の食材はほとんど使わない。
・調理実習については、中１でおやつ、中２で食事、中３でパンやケーキを行う。民族食（マレー料理とか）の調理実習はしない。

（イ）St. George's Girls' School を訪問して

平成２６年１０月３０日に、St. George's Girls' School を訪問した。マレー語名は、SMK (Perempuan) ST. GEORGE である。１８８４年創立の伝統校で、過去に孫文氏の孫も在籍していた。現在１３００名が在籍している。

・中学３年(F3)の家庭科の授業で、「ビスケットの調理実習」であった。２時間扱い。
・女子校なので、この授業の生徒全員が女子の

クラスであった（２４名）。指導している教員はイギリス人、生徒はマレー系・中華系・インド系が全て所属していた。英語で授業を行っていたが、板書はマレー語であった。

・宗教により食べることができない食材があるので、配慮している。

・中学３年の調理実習は、年５回である。

・日本と同じように、家庭科だけではなく、女子も技術領域を学習する（電気や農学など）。家庭領域と技術領域の両方を、Home Science Teacher が指導する。

（３）親日国マレーシア

第４代首相のマハティール氏が１９８１年に提唱した東方政策により、日本とマレーシアの人的交流と相互理解が深まり、両国の絆がさらに強いものとなった。日本に留学経験のあるマレーシア人で組織した JAGAM（マレーシア元留日学生協会）が現在でもマレーシア社会の中で活躍するとともに、日馬友好のためにご尽力いただいている。また、長年にわたってマレーシアで活動している日本人や日本企業の先人の方々の努力により、マレーシア人の日本および日本人に対する評判は、民族に関係なく極めて良好である。

（４）東洋の真珠ペナン島

ペナン島は、半島マレーシア北西部のマラッカ海峡側に浮かぶ島である。周囲が６０㎞程の小さな島の中に、約７５万人の人々が暮らしている。ペナン島にもマレー系、中国系、インド系と様々な人々が住んでいるが、中国系が約６０％と最も多く、その中でも福建系が多い。

①観光地としてのペナン

昔から「東洋の真珠」と称えられてきたペナン島は、豊かな自然環境に恵まれたリゾート地である。また、イギリス植民地時代の建物や様々な文化が融合した独特の街並みが残っていて、２００８年には市街地のジョージタウン地域がユネスコ世界文化遺産に指定され、今でも多くの観光客が訪れている。

②工業都市としてのペナン

２０２０年に先進国入りを目指しているマレーシアは製造業の振興に力を入れており、ペナン州にも工業団地が整備され、電子・電気・半導体・機械などの工場が多数稼働している。日系企業も数多く、２０１１年には１９３社の日系企業がペナン州に進出している。

２．ペナン日本人学校の概要と特色ある教育

（１）学校の概要

昭和４９（１９７４）年１０月５日に設立され、平成２６年度に開校４０周年を迎えた。設置者はペナン日本人会であり、在ペナン日本国総領事館の指導・助言を受けながら、学校運営委員会により学校が運営されている。

平成２７年４月現在の児童生徒数は、小学部１２１名、中学部２８名、計１４９名である。児童生徒

数の増減は、日本・世界の経済状況に強く影響を受け、ここ数年は微増傾向にある。

児童生徒の約４分の３以上が日系企業駐在員の子供であるため、出身地が関東・中部・近畿に集中し、在籍年数も約３分の２が３年未満である。

父母のどちらかが外国人である児童生徒の割合は約１５パーセントほどであり、中には家庭で日本語以外の言葉を使用する子どももいる。日本語の力が十分ではない児童生徒が増える中、教員数の不足により十分な特別支援の体制を構築することができない状況にある。

平成２６年度の教職員の構成は、文科省派遣教職員が１１名、日本人の現地採用教員（常勤）３名、マレーシア人の現地採用教員が２名、現地採用非常勤講師が４名、事務員等の現地スタッフが７名となっている。

（２）特色ある教育

①現地理解教育

ペナン日本人学校の学校教育目標は、「PJS かがやきプラン」であらわされる。

◎かんがえる子……自分の考えを持つ、伝える力をつける　「知」
◎がんばる子……進んで体をきたえる、健康で安全な生活をする　「体」
◎やさしい子……けじめをつける、思いやりの心をもつ　「徳」
◎きょうりょくする子…日本、郷土を愛する、マレーシア・ペナンを知る「国際理解」

教育の三要素である知・徳・体に加えて、在外教育施設ならではの「国際理解教育」を重点の一つに挙げている。その推進のために、次のような教育活動を実施している。

（ア）現地校・国際学校との交流学習

小学部は低学年、中学年、高学年ごとに国際学校と、中学部は現地校と交流学習に取り組んでいる。隔年で訪問と来校を交互に行い、お互いの教育活動を経験したり、様々な交流活動を行っている。日本人学校に来校した時は、日本の文化、遊び、食べ物などを紹介する活動に取り組むことで、日本人学校の児童生徒が日本について学習する良い機会となっている。

（イ）小学部移動教室、中学部修学旅行

小学部５・６年生が、隔年でランカウィとクチンを旅行地に２泊３日の移動教室を実施している。ランカウィではマングローブの植林体験やパヤ島でのシュノーケリングなどの活動を行い、クチンでは少数民族の文化体験や熱帯雨林の生物観察などに取り組んでいる。

中学部は、３泊４日の修学旅行でコタキナバルを訪れている。ボルネオ島の山や海の自然観察の他に、先住少数民族の村でのホームステイをはじめとした、文化体験活動を行っている。

ペナンから離れて、マレーシア各地の自然や文化について学ぶ貴重な機会となっている。

（ウ）民族音楽鑑賞会

３年一巡でマレーシアの三大民族の音楽である「マレー音楽」「中国音楽」「インド音楽」の鑑賞会を開催している。音楽鑑賞の他、民族ダンス体験や民族楽器体験も併せて行い、音楽を通して他文化を体験する機会となっている。

（エ）マレー語講座

マレーシアでは広く英語が通用することもあり、今まで日本人学校の中でマレー語を学習する機会が非常に限られていたが、平成２６年度より、USM（マレーシア科学大学）の日本語履修学生を講師に招き、全学年でマレー語の学習に取り組んでいる。学習の成果を移動教室や修学旅行、学校交流会で活用するなど、子供達は意欲的に学習に臨んでいる。

②日本人ならではの教育活動

日本からはるか遠くのペナンに居住する日本人の子どもたちに何とか日本で行われている教育を受けさせたいというペナン在留邦人の切実な願いからペナン日本人学校が開校したこともあり、本校では日本の学習指導要領に準拠した教育課程が編成されている。

学校行事も、日本で行われているものは基本的に実施しており、６月の運動会や９月のペスタ・ブンガヤラ（学芸会＆学校祭）は日本のものとほとんど変わらない内容である。また、年中暑く四季がないので、季節感の感じることができる盆踊りや餅つき大会（日本人会行事）、七夕集会、こいのぼり、ひなまつりなどを大切にしている。

③ＥＳＬ（英会話学習）

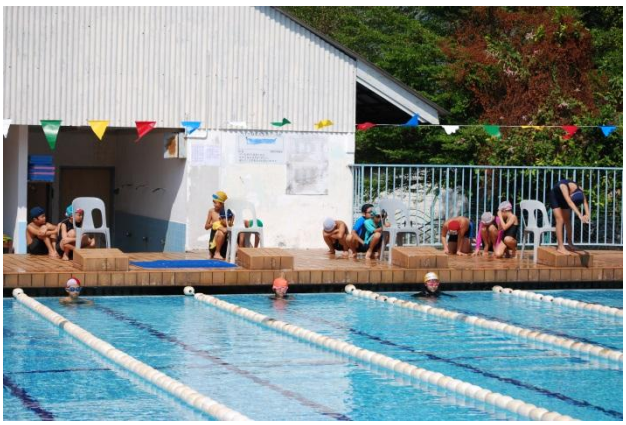
英語が通用する外国で生活している環境を生かして、小学校外国語活動や中学英語の学習とは別枠で、小学部１～６年は週２時間、中学部が週１時間のＥＳＬ（英会話学習）の授業を実施している。マレーシア人講師により、授業時間中ほとんどすべてを英語で授業が行われている。１学年を３～４グループに分け、能力別の少人数指導となっている。なお、初級クラスには日本語を話すことができる講師を配置するなどの配慮をしている。

④年間を通した水泳学習

１年を通して気温が高い環境を利用して、年間を通して週１時間の水泳学習に取り組んでいる。登

下校にはスクールバスを利用し、放課後、休日も自転車や徒歩で友人宅に遊びに行くことができない環境下にある子どもたちにとって、体力作りの貴重な機会となっている。

また、年に１回の水泳記録会を開催し、学習の成果を保護者に披露している。小学部高学年は国際学校と対抗戦を行うなどの国際交流の場となっている。



３．在任中の教育実践・学校運営

（１）小学部の理科を担当して

１年目と３年目に小４、２年目に小３の理科を担当した。季節により北を通る太陽や月、四季がなく一年中代わり映えのしない動植物たちに囲まれた中、ＩＣＴ機器を活用した視聴覚教材が大いに活躍した。赴任当初は学校財政が厳しく、授業で使えるテレビにも事欠く状況であったが、開校４０周年記念事業の活用等により、全学級で整備することができた。

ペナンは日本人の長期滞在者がたくさんいらっしゃるが、その中で園芸に詳しい方に協力を仰ぎ、植物栽培のアドバイスをいただいたり授業にゲストティーチャーとして招くなど、なかなかうまくいかない植物栽培の授業の改善を進めることができた。

また、月の満ち欠けと中国暦の関係など、多文化理解に関する話題も取り入れるよう配慮した。

（２）学校運営上の取り組み

①学校運営委員会・日本人会・総領事館との連携

学校の管理、運営については、月１回開催される学校運営委員会において協議される。日本人会の副会長（教育部会長）が学校運営委員長に、日本人会理事（教育副部会長）が学校運営委員会代行に就く。他には、総領事館の学校担当領事、委員長が推薦する企業代表者、父母会長・副会長、校長・教頭が委員となる。

メンバーの全員が日本人学校の重要性を十分理解されているので、皆さんがお忙しい立場であるにもかかわらず、学校の諸問題について真摯に協議、対応していただくことができた。企業の方が多いので、日本の公立学校ではあまり意識しないコスト管理や顧客意識等について学ぶ機会となった。

学校の設置者であるペナン日本人会からは、学校会計助成をはじめとして、学校存続に対して全面的な協力をいただくことができた。また、在ペナン総領事館からも、学校課題解決のために適宜指導助言を得ており、特に児童生徒の安全に関して適時的確な支援をいただき大変お世話になっている。

私の在任中、学校会計の逼迫化や校舎の老朽化対応、開校４０周年記念事業の実施など、数多くの課題の解決に向けて、学校運営委員会や日本人会、総領事館からたくさんの協力をいただいた。今回、教頭として赴任し、学校運営委員会や日本人会、総領事館の方々の働きを間近で見ることができ、いかに日本人学校がペナン在住の日本人の皆さんに支えられ大切にされているということを、身をもって実感することができた。

②教職員関係について

全国から集まっている文科省派遣教員は優秀であり、教育に対する情熱もすこぶる高い。その先生

方の力を最大限に引き出すため、学校のチームワークを大切に、組織を生かした学校運営に努めるとともに、学校の教育環境の改善に力を尽くした。

また、教頭という仕事柄、現地スタッフとの関わりが多かったが、民族は違っても同じ仲間として誠実に接するよう心掛けた。仕事ではもちろん、私生活の面でもたくさん助けていただいた。

③ペナン日本人学校の立ち位置について

最近のロングステイヤーの中には、学齢期の子どもを伴ってペナンにやってくる家族も多くなってきている。そこで問題になるのが、子どもの学校選択である。せっかくの海外生活なのだから子どもに英語を身につけさせるために国際学校を選択する方も多く、そのため日本人学校入学者が少なくなっていた時期もあったと聞いている。また、日本人学校の保護者から英会話の授業を充実させるよう強く要望が出される時もあった。

しかし、日本人学校の使命は、ペナンで生活している日本人の子どもたちに、日本の義務教育で保証されている力をしっかりと身につけさせる教育を実施することである。このことを常に意識し、日本の教育に誇りを持ちながら３年間職務に当たってきた。このことを大本に据えながら、在外に生活している環境を生かした教育も合わせて推進していくことを心がけていた。

４．ペナンでの生活

（１）多文化が体験出来る街

マレー系、中国系、インド系のそれぞれの民族が自分の文化、宗教、言語を大切にして生活しているので、ペナンに住んでいる外国人の私も一緒に体験することが出来る。

例えば、マレー系のイスラム教についていえば、最大のお祭りである断食明け大祭（ハリラヤ・プアサ）で名士が食事を振る舞うオープンハウスには、外国人も参加することが出来る。また、スーパーマーケットの売り場やレストランでは、ハラル、ノンハラルがはっきり区別されているのを見ることができる。

インド系の宗教であるヒンズー教のお祭りであるタイプーサムでは、行者が体に針を刺し重い山車を引っ張りながら寺院まで行進する様子を見ることが出来る。あまりにも残酷であるため、インド本国で禁止され、今ではペナンを含むマレーシアとシンガポールでしか行われないそうだ。

中国系のお祭りでは、お盆や正月でのライオンダンス（日本の獅子舞）やアンパオ（日本のお年玉）など、日本でも行われているがずいぶんと内容が違っている風習を体験できた。

逆に、ペナン州観光局が主催する「ペナン盆踊り」は、日本人会や総領事館の協力の下、日本の盆踊りやお祭りをマレーシア人の方に体験してもらう一大イベントで、毎年何万人という人が参加する。日本人学校の子供達にとって、日本から遠い異国の地にあって、日本のお祭りを体験する数少ない機会でもある。

（2）美食の島　ペナン

様々な文化が共生しているペナンは、「美食の島」としても知られている。マレー料理はもちろん、中華料理、インド料理、その他の国々の料理など、様々な料理を味わうことができる。また、街の至るところに安価で質の高い屋台やホーカーセンターがあり、朝・昼・晩と気軽に利用することができる。

中華料理は、先祖の出身省ごとに福建料理、広東料理、海南料理、潮州料理、客家料理などに分かれ、それぞれ味わいが違っている。ペナンでは、朝に広東料理の飲茶を食べ、昼には福建料理のホッケンミーを食べ、夜には海南料理のチキンライスを食べるということができる。また、ニョニャ料理という、中国系の富豪にマレー人の花嫁が嫁いだ家族の家庭料理も味わうことができる。

日本料理も、高級割烹料理からラーメンまで揃い、また、外国資本の回転寿司屋もあり、在留日本人はもちろん、マレーシア人にも人気が高い。

また、マンゴーやパパイヤ、マンゴスチンなどの常夏の地ならではのトロピカルフルーツを味わうことが出来る。スイカは年中、店頭からなくなることはない。また、果物の王様であるドリアンはペナン特産であり、あの濃厚な味のとりことなり、この３年間ですっかり好物となってしまった。

食道楽の私はもちろん、日本人学校の子供達もペナン滞在中、様々な民族の食文化を十分堪能することができたと思う。

５．終わりに

マレーシアで３年間お世話になって、この国が「お互いの違いをわかり合い、譲り合う心」「広い条件下の者が狭いほうの条件に合わせてあげる」すなわち、異質なお互いは相対的なものであり、どちらかが絶対を主張して他を排斥しないことを国のルールとして確立し国民が理解しているということを強く感じるようになった。

このような国にある日本人学校で、外国の地で頑張っている子どもたちのために勤務できたこと、また妻や３人の子どもたちと家族一緒に暮らすことができたことに感謝している。また、日本人学校に子どもが通う父親という立場で、全国から集まっているたくさんの保護者の方々と交友を深めることもできた。今回の機会を与えて下さった文部科学省、北海道教育委員会に心よりお礼を申しあげると共に、この経験を北海道の子どもたち、先生方のために還元していきたい。